

甘くてキケンな主従関係

想像通り……なんて素敵洋館。

蔦の絡まる門の前でその建物を見上げ、明はうっとりため息をついた。

柵状の門扉の隙間からは、正面の玄関まで続く白い敷石のアプローチが見える。

その上にかかるのは薔薇のアーチ。玄関ポーチの上にはフランス窓のあるバルコニー。

白い板張りの壁にも、ところどころ蔦が絡まっていて、屋根には風見鶏まである。

本当に絵に描いたような「お屋敷」に、明は胸を高鳴らせた。

私、今日からここで働くんだわ。

それも住み込みのハウスキーパー。

このお屋敷だと、メイドっていう感じがかな。

ご主人様もきつと、このお屋敷に相応しい優雅な貴婦人よね。

明は旅行かばんから家政婦紹介所に渡された契約書を出して、視線を落とした。

雇い主の名は真城忍。職業、小説家。

若い女性に絶大な人気を誇る作家で、明も名前だけは耳にしたことがある。

明は大の読書好きだ。しかし残念ながら、雇い主である真城の小説は読んだことがない。というのも真城の作品は主に恋愛小説だから。

明の好みは時代小説や歴史小説、あるいはファンタジーやSFで、恋愛小説は守備範囲ではなかったのだ。恋愛物でも、コメディだったり、中世ヨーロッパなどが舞台の歴史物っぽい話であれば読むのだが……

さすがに雇い主の本を読んでいないのはまずいと思い、先日一作だけ読んでみた。

それはものすごく切ない悲恋物で、読み終わった後はついつい泣いてしまったのだ。

続いて他の作品も読んでみようとしたのだが、あらずじからして、すべて切ない系の話ばかりで、明は読むのを断念した。

悲しくなる本は好きじゃない。

中盤は悲しかったり切なかったりしても、最後は絶対ハッピーエンドじゃないと、どうしても受け付けないのだ。

でも……

明はポニーテールを揺らして、再び真城の屋敷を見上げた。

こんなお屋敷に住んでいて、あんな切ない話を書く女性ってどんな感じの人かしら？

きつといつも白いワンピースを着ていて……

コーヒーより紅茶が好きで……はかない雰囲気で……

『ありがとう明さん、あなたの入れてくださるお茶はいつもいい香りだわ』

『ありがとうございます、ご主人様』

『ご主人様はやめて。忍って呼んでくださらない？』

……って感じの、上品で素敵な女性に違いないわ。

勝手にあれこれ想像——というか妄想をして、明はついにやとやとしてしまう。

「おい。その不審者」

ふいにそんな声がかけれ、明の妄想は破られた。

「え、あつ。はい」

慌てて振り返って、声の方に目を向ける。

声の主は門扉のすぐ向こうにいた。

それもこんなお屋敷の門の中にいるのに相応しい美青年だ。

髪も肌も目も色素が薄く、物語の中の王子様のように陽の光を受けて輝いている。

「そこで何をやっているんだ？ 呼び鈴を押すでもなく、ため息をついたり、にやけたり。不審者以外の何者でもない」

「す、すみません。私、不審者じゃありません」

頭を下げながら、誰だろうとぼんやり考える。

まさか執事？

こういうお屋敷だし、執事がいてもおかしくない。
でも執事っぽい服装じゃない……

見れば相手は、膝の抜けたジーンズに、洗いざらしで皺だらけのTシャツ姿。
見た目が王子様風なだけに、なんとなくちぐはぐだ。

「じゃあなんだ？」

青年は顎を心持ち上向かせ、威圧的な雰囲気でも明を眺めた。

「ファンにも見えないし、家出か？　ここはホテルじゃないぞ」

そう言っつて、明の足元に置かれた大きな旅行かばんを門扉越しに軽くつま先で蹴ってきた。

やだ……。なんか感じ悪い……

せつかくの王子様風の美貌もこれじゃあ台無しだわね。

それにファンつて何？

心の中ではあれこれ思いながらも、明は微笑んで挨拶する。

「こんにちは。私、小沢家政婦紹介所から来ました……」

「え？　……ああ、とりあえず入って……」

明がすべて言い終わる前に、男は両開きの門扉の脇にある通用口の扉を開けた。

男への不信感を募らせつづ、明は扉をくぐる。

門の中には外観と同じく素晴らしい光景が広がり……とは行かなかった。

外から見た時はとても素敵だったのに、こうして近くで見るとせつかくの白い敷石はなんだか薄

汚れていてグレーっぽいし、今が盛りのはずの薔薇のアーチもまったく整えられていない。

アプローチの左右に広がっている庭も芝生が伸び放題だ。

なんだか荒れている。どうして？　もったいない。

その印象は、玄関に入ってからでも続いた。こっちは荒れているというよりは、掃除が行き届いていない感じだ。

さらに通された玄関ホール脇の応接室も、一応は片付いているけれど、やはりどこことなく薄汚れている。

なんでこんなに？

そう思うのと同時に、だから私が雇われたのかと明は納得する。

この屋敷や庭を、絶対私の力で綺麗にしてみせる。

そう意気込みながら勧められたソファに座ると、目の前の男に家政婦紹介所からの紹介状と契約書を渡して見せた。

男はそれに目を通し、ため息をついてから口を開く。

「出て行ってくれないか。君はクビだ」

「……はっ？」

思いがけない言葉に反応が遅れる。

「だから、君に来られると困るんだ」

「えっ？」

意味がわからない。

クビも何も、だって私は今来たばかりだし……

明は半笑いの表情で男を見た。

「えつとあの……。私まだ働いてませんけれど？ それでもクビですか？ というより、あなたに私をクビにする権利があるんですか？」

「は？ 何を言ってるんだ？」

「だってあなた、真城忍さんじゃないでしょ？」

明はつい相手をなじるような言い方をしてしまった。

「何だって？」

ワントーン高い声を出して、男は明をまじまじと見つめてきた。

「君はどこか抜けているのか？ ただの馬鹿なのか？ それとも目が悪いのか？」

「私、視力は一・二あります。学校だって首席で卒業しましたっ」

つい子供じみた反論をしよう。

「はっ、俺に言わせれば、君は充分間抜けだ」

お話にならない、といった感じで男は首を振り、肩を竦めている。

「いや、間抜けなのは君を派遣した家政婦紹介所だな。俺は男の家政夫を頼んだんだ」

「俺はって、まるであなたが雇い主みたいな言い方ですね。雇い主は真城忍さんでしょ？」

真城忍さんは女性なのに、何を言い出すんだろう、この人は……

もしかして、真城さんのマネージャーかしら？

そんな明の疑問は男の次の言葉で否定される。

「そうだ。俺が真城忍だが？」

「ええっ！」

明は叫んだ。そのまま、驚きのあまりしばらく呆然としてしまう。

作品のように、はかなげな美しさを持った女性だと思っていたのに、男？

年齢だって、今年二十五歳になる自分よりも若く見えるし、まさか……信じられない。

明は何度も瞬きを繰り返した。

「だって、だって……。女性の名前だし……」

「それはこっちの台詞だ。紹介所には男を頼んだんだ。君の名前はどろ見ても男じゃないか。今日から新しい家政夫が来ると聞いて待っていたところに君が現れて……。女性だったから変だとは思ったけど、何か紹介所から連絡でも持ってきたのかと思つてとりあえず屋敷には入れたんだが……」

男——真城は天を仰いだ。

「わ、私の名前は明と書いて、あき。って読むんです。小野明です」

何を言っているかわからなくなった明は、とりあえずそれだけ伝える。

「あ、そう……。俺はまんま、しのぶ。だけど、男にもある名前だというのはわかるよな？ 勝

手に性別を勘違いしていたのは君の方じゃないか」

真城は肩にも付きそうな長めの髪に手を差し入れ、がしがしとかき回した。そのがさつな仕草に、明は眉をひそめる。さっきの感じ悪い態度といい、黙って立っていれば「超」がいくつも付くくらい的美青年なのに、ギャップが激しすぎる。

そもそも明はこの手のタイプの無礼な男が嫌いだ。どんなに綺麗な顔の王子様でもお断りだ。「勘違いって……、それは真城さんだって……」

確かに紹介状や契約書には性別の欄はない。

それが原因で起こるトラブルは今まで一度もなかったが、これからは性別も書いてもらうようにしなきゃ、と明は頭の片隅で思う。

「ひよっとして、私の名前だけ見て男だと思い込んで……。あの……、紹介所に確認はしたんですか？」

そう言うと真城は気まずそうな顔になり、フイツと横を向いた。どうやら確認はしなかったようだ。明の所属する家政婦紹介所では紹介の依頼を受けると、雇用主の求める条件にあった候補者たちの簡単なプロフィールを提出する。雇用主はそれを見て、ならばこの人で……と頼むのだ。本来であれば雇い主と家政婦が直接会って契約書を交わすのだが、今回は先方が多忙かつ急いでいるとことで郵送で済ませてしまった。

「とにかく……。そういうわけだから、君との契約はなしだ。すぐに帰ってくれないか。それに俺は一人暮らしだ。女性の住み込みは勘弁願いたい」

真城は明の腕を取り、応接室から無理矢理追い出そうとした。

「ひ、一人暮らし!? い、いえ、待ってください。困ります私」

猫足の大きなアンティークソファにしがみつき、明は抵抗する。

「住むところないんです」

「はい?」

真城の眉がびくりと跳ね上がった。

「だって、住み込みですよ、このお仕事。それも三ヶ月」

「そうだけど……子供の頃から祖母みたいに世話してくれていた家政婦がいたんだが、入院してしまつて。まあ三ヶ月もあれば復帰するだろうから、その繋ぎのつもりで……」

「ですよ。だから私、その間は住み込みをさせていたただきたくて……」
事情を話そうとしたが、真城はそれを遮る。

「断る。さっきも言っただろう、女性ではなく男性の家政夫をお願いしていたって。男なら誰でも良かった。今まで何人かに繋ぎで来てもらったけれど、全員女性で……。とにかく、女性の家政婦はもう嫌なんだ」

「嫌って……」

そんな理由でこのまま追い返されたらたまらない。明には、どうしても帰れない事情があった。たとえ真城が男で、一人暮らしをしていても。

「住んでいたアパート、老朽化して急に取り壊すことになったんです。跡地は駐車場にするとかで……。管理会社さんが次のアパートを各人居者に紹介してたんですけど……。住み込みの仕事が

あるなら三ヶ月分の家賃がもつたいないなあって思って私、その話を断って、どこも契約してないんです！ ここにいる間にゆっくり次のアパート探せばいいかって思って……」

「ぼっ……、馬鹿かつ！」

真城は明以上に大きい声を出した。

「聞抜けだとは思ったけれど、ここまでとは……。だいたい君は若い女性で俺は男。それも一人暮らしだ。なのに住み込むと？」

「し、仕方ないじゃないですか。本当に住むところがないんですから」

雇い主が女性だと思っただから、何も考えずに住み込みの仕事を引き受けた。しかし雇い主は男。そこは確かにものすごく問題である。

だがそれ以上に住むところがない方が、もっと問題だ。

「で、でも……泊めてくれるような友人はいないし、一、二、三日ならホテルとかネットカフェとかに泊まるお金はありますけれど、その間に次の住み込みのお仕事を見つけないと、私本当に……」

どうしよう……

このままホームレス？

それだけは嫌だ。

ここに泊めてもらった場合、いきなり真城に襲われる可能性はあるけれど、ホームレスよりはマシのような気もする。

それにホームレスの方が襲われる可能性が高い。それも誰ともわからない相手に。

少なくとも真城は、身元だけはしっかりしているし……

「住民票だって、たった三ヶ月だけ何かあった時のためにつて、ここに移してきちゃいました」

「じゅ、住民票まで？」

真城の口があんぐりと開く。

それに構わず明はまくしたてる。

「実家だって、兄夫婦とその子供たちが同居してて、しかも子だくさんな上に、私アパートの荷物も送っちゃったんで、私が寝る場所なんてどこにもなくて……」

明の訴えを聞いて、真城は文字通り頭を抱えて座り込んでしまった。

「わかった……」

やがて疲れ切ったような声を出し、真城は立ち上がる。

それから何度も深くため息をついて明に視線を向けた。

「半月ぐらいの滞在なら許そう。その間にとっとと住む場所を見つけるなり、次の住み込みの仕事を見つかるなりして出て行ってくれ。住民票も仕方ない……。当面はこの住所で構わない」

「あ、ありがとうございます」

明はしがみついていたソファからようやく離れ、真城に深々と頭を下げた。

「つたく世話の焼ける……。部屋のことだが、二階の東の部屋と南の部屋、それから一階の中庭に面した部屋と、キッチンの奥の部屋以外なら好きに使っていい。普段は使っていないから」

「ありがとうございます」

ここにしばらくは住める。ホームレスにならずに済む。

安心したとたん、真城が男であるという事実がものすごく心配になってきた。

この人は信用できる男性なのだろうか？

そう思うと、ひどく落ち着かなくなる。

それが態度に出ているのだろう、不審そうな顔をして真城が近づいてきた。

「なんだ？」

びくりと肩を揺らし、明は思わず一步下がってしまう。

「あ？」

足を止めた真城が不快そうに鼻に皺しわを寄せた。が、次の瞬間、ニツと目を細める。

「俺に下心でもあつて君を泊める気になったとでも？ 安心しろ、君を襲ったりはしない」

人を馬鹿にしたようなその笑顔に、明はムツとした。

「どの部屋も内側から鍵がかかる。適当に使うといい」

それだけ言い捨てると、もうこれ以上話すことはないとはばかりに真城はさっさと応接間を出て行った。

「は、はい」

一瞬遅れて真城の背に頭を下げた明は、ドアが閉じられたとたん、改めてホーツと胸を撫なで下ろした。

とりあえず身の危険もなさそうだし、しばらくはここに置いてもらえる。

その間に住む場所を探したり、新たな仕事を探したり、何より紹介所に連絡して事の次第を報告しなければならぬが、やはり安堵の気持ちの方が大きい。

すると単純なもので、まずは家の中を見て回りたくなり廊下に飛び出してしまふ。

下町の狭い借家で育った明は、子供の頃から広い家に憧れていた。

家政婦になったのも、憧れの広いお屋敷の中に入れるからだ。もちろん掃除や洗濯といった家事が好きだから、というのも理由の一つだけれど。

二階の東の部屋と南の部屋、それから一階の中庭に面した部屋に、キッチンの奥の部屋以外ならどこでも使っていていいって言ってたわよね。

キッチンの奥の部屋は、たぶん今入院しているとかいう、昔からいた家政婦さんの私室ね……

他の部屋は真城さんの寝室とか仕事部屋かしら？

廊下には窓がないため、ひどく暗い。突き当たりに見えるドアに嵌はまった曇りガラスからしか光が入ってこないようだ。

たぶん、あのドアから中庭に出られるのだろう。

明はとりあえず、両側に並ぶ部屋の中から自分に一番近いドアを選んで開けようとした。

あ、でも。

その前にとにかく連絡しないと……

思い直して携帯電話を取り出した明は、紹介所に電話をする。

真城からの紹介依頼の内容を確かめて、真城が滞在させてくれている間に、次の職場を探してもらわなければいけない。

「もしもし小野ですが……」

『あ、明ちゃん。今日から新しいところですよ。どうしたの？』

ワンコールで出た男性は、事務主任の馬場ばばだった。明より七つほど年上で、明を妹のようにかわいがってくれる人だ。もともと馬場は誰に対しても優しく、明には兄みみたいな存在であるし、他の人たちには息子、あるいは弟みたいに親しまれていた。

「それが……」

さつそく説明をすると、馬場の声が裏返った。

『ちょっと待って、真城さんのお宅だったよね。確かおばあさんと暮らしているはずなんだが、一人暮らし？ 今確かめるから。あ、でもこちらのミスじゃなくても、男性一人の家に住み込みはまづいから、他の人と代わってもらえないか調整してみる。もちろん真城さんにもそれで納得してもらうようにするし』

「はい。お願いします。あ、でも私……」

実はアパートを引き払ってしまったこと。でも、真城も次のアパートと職場が見つかるまでは置いてくれると約束してくれたこと。そんなことを含めてこれまでの経緯を伝えた。

『なんだって？ アパート引き払ったって……そういう時は連絡してもらわないと。わかった。それもこつちで考えるから、少し我慢しててね』

「はい。お手数おかけします。よろしくお願いいたします」

電話を切り、明はふうつと息を吐く。

さつきは住むところがなくなると焦るあまり、雇い主である真城に対して小さな子供のようにだだをこねてしまった。

最初から馬場に電話していればよかった、と明は少し前の自分を思い出して顔を赤くする。その頬を軽く手で叩き、改めて近くにあった部屋に向き直って、そのドアを開ける。

「何っこれっ！」

ドアを開けたとたん、明は思わず大声を出してしまった。

なんて汚い部屋なんだろう。玄関や今までいた応接室も掃除が行き届いていなかったが、ここには数年分と思われる埃ほこりが積もっている。

元は客用の寝室だったのだろうか。シングルベッドが二つ置かれていた。が、被せられたシートには数分と思われる埃が積もっている。床も埃で白くなり、うかつに踏み込んだら足跡がくつきり残ってしまう。いくら使っていない部屋だからといって、これはちょっとひどすぎる。

入院しているという家政婦さんや繋ぎの家政婦さんとやらは、いったい何をしていたんだろうか？ どんなに広い屋敷だって、毎日一部屋ずつでも掃除していれば、決してこうはならないはず……

元の家政婦さんがいつ入院したかはわからないし、繋ぎである家政婦さんたちがいつ辞めたのか

もわからない。

でも、玄関や応接室はここまで汚れていなかったから、そこはきちんと掃除をしていたのだろう。来客を通す場所だから、当然かもしれないけど……

しばしの間、汚れきった部屋の入り口で立ちすくんでいた明の頭の中に、ふいに「まさか」とある考えがよぎった。身をひるがえした明は、急いで廊下を歩きながら他の部屋のドアを片っ端から開けていく。

案の定、どの部屋も埃だらけだった。

そして広いキッチンには、汚れた食器がたまっており、リビングと思われる部屋にも本や新聞がちらばり、ごみ箱からは入りきらなかったごみが溢れていた。

幸いというべきか、キッチンやリビングの汚れはせいぜい数日分といったところだ。おそらくこれは、明の前任の家政婦がいなくなった後の汚れなのだ。

「もうっ……」

そうは言ってもあまりの汚さに、明は呆れと怒りで頬を膨らませてしまう。

「掃除しなきゃ」

どこかに掃除道具はないかと、今度は納戸なんどつぼいドアを開けてみた。

あった！ 掃除機！

長い間使っていなかったのか、これもまたどことなく埃つぽかったが、見つけたことの方が嬉しくて、うきうきと引っ張り出す。

「さっきから、何をしているんだっ！ バタバタとうるさい！」

突然、背後から怒鳴られた。

「きゃあっ！」

いきなりの真城の登場に、明は驚いて声を上げる。

「きゃあ、じゃない。何をしていると聞いているんだ」

振り返ると真城が険しい顔をして明を睨にらんでいる。

「何って、その……。掃除しようと思って……」

「なぜ？」

真顔でそう聞かれ、明は面食らった。

「なぜって……。その……。あちこち汚れているし……。えっと、使わせていただくと思った部屋だって、掃除しないと……」

真城さん、なんでこんなに怖い顔をしているんだろう。

明は少しおどおどしてしまふ。

「そうか……。だったら、掃除は君が使う部屋だけにしてくれ。他のところには一切手をつけな」

「えっ？ どうしてですか？」

「どうしてっ？」

びくりと真城は頬を引きつらせる。

と思ったら身を乗り出すようにして明の前に顔を突き出し、念を押すように大声を出した。
「俺はうるさくされるのが嫌いだ。特に掃除機の音は大嫌いだ。仕事してるのに気が散る」

思いっきり眉間に皺しわが寄っているし、目つきも険しくなっている。元が綺麗な顔なだけに迫力満点だ。

うっ……なんか怖い……

びくびくしながらも明は、どの部屋もひどい埃ほこりをかぶっていたのは、この調子で屋敷の主人が掃除をするなど言っていたせいなんだと納得した。

「あの……。でも……」

箒ほうきで掃くとか拭き掃除とかであれば構わないだろう——と言いかけたところで電話の音がした。

「はい。真城……」

真城は自分の背後の壁にかけられた子機を取り上げた。

「ええ……。はい。はい……。えっ！」

とまどったような真城の声がある。

どうしたのかしら？

その様子を見た明は、彼に背を向けて離れようとする。他人の電話を聞くわけにはいかない。その時、明の携帯電話にもメールの着信が入った。

何かしら？

見ると、馬場からだ。

メールの定型挨拶に続いて、『さっきの件ですが、真城さんの勘違いだとわかりました』とある。さっき電話で、真城にいきなりクビだとか、男の家政夫を頼んだはずだと言われたと伝えていたが、それに対する返事だった。

やっぱりこっちが正しかったのね。

明は少し胸を撫なで下ろしたが、続く文面を見て、すぐに顔をしかめた。

『ただ、代わりの人も新しい職場もすぐには見つかりそうにありません。真城さんのお宅での仕事を通いにするのは可能ですが、どうしますか？』

どうしますか？ と言われても……

すぐに次のアパートが見つけれなければいけないけれど、そのアパート探しは紹介所の仕事ではない。管理会社からの物件紹介を受けなかったのは明の勝手な判断だ。

とりあえずはウィークリーマンションウィークリーマンションの類ぐいでもいいかな、という考えも浮かんだが、短期間でまた次の部屋を探す手間暇を考えるとあまり気が進まない。

だいたいアパートなんて、焦って見つけようとすればきつと失敗するだろう。

やはり、住むところが見つかるまではこの屋敷に置いてもらうしかない。そうすると今すぐに通いの契約にするわけにもいかないのだ。

「あの……」

ここは真城と交渉するしかないだろうと、明は勇気を出して真城に声をかけた。ちょうど彼の方も電話が終わったようだ。

電話を切った真城は慥然とした表情で首を振っていた。

「おい、家政婦。君にとつては朗報だ。今日から三ヶ月間、君はうちの家政婦だ。住み込みでも通いでも、どっちでも好きな方を選ぶといい」

「え？ それって……」

おそらく今の電話は紹介所の誰かからだったのだろう。どうやら交渉してくれたらしい。助かった、と思つたが、それと同時に……

「私、家政婦つて名前じゃありませんっ」

尖った声よびが口をついて出た。

こんな状況にもかかわらず、自分の呼び名が気になるなんてどうかしている。そう思つたけれど、どうにもひっかかるのだ。

たぶん真城の呼び方が、明の耳にはものすごく意地悪に聞こえるからだろう。

「じゃあ、なんだ？ ハウスキーパーか？ それともハウスメイド？ お手伝いさん？ 女中か？ 侍女か？ あー。小間使いという言い方もあるな」

苛々した様子で真城は聞き返してくる。

「小野明です。さつきも言いました」

急に泣きたくなってきた。

憧れのお屋敷で、素敵な女主人のもとで仕事ができる。そう思っていたのに……

いきなりクビと言われたり、顔だけはいいけれど感じの悪い男に怒鳴られたりするのがとても理

不尽で、悲しい。

「し、仕事のことは……、私も普段から男と間違われていないか確認しておけばよかったと思えます。帰る家がないから居させてくれっていうのもあつかましかったです。でも……」

すん、と明は鼻をすすった。いつの間にか半泣きになっていた。そのことに自分でも驚き、慌てて堪えようと努力した。が、今度は声が震えてくる。

「ああ、もうっ……」

軽く舌打ちをして、真城はまた頭をがしがしと掻いた。

「まるで俺が泣かせているみたいじゃないか……」

「私泣いていませんっ」

涙はまだ出ていない。だから泣いてなんかいない、と明は唇を噛み締めた。

「俺が……」

何か言いかけて、真城は掃除機が入っていた納戸なんどの棚からトレットペーパーを取り出し、明に押し付けた。

「えっ？」

なぜトレットペーパー？

真城を見ると、彼は微妙に照れたような表情を浮かべて、フィツと横を向いた。

「いいから、鼻をかめ」

「あっ……」

気を使ってくれている？

怖いばかりじゃなくて、優しい部分もあるのかな？

些細な^{ささい}ことだけれど、明は嬉しくなって微笑んだ。

「あ、ありがとうございます」

あれ？ この人、ひよっとしてそんなに悪い人じゃないかも……

たかだかトイレトッパーを差し出されただけで、そんなふうに感じるなんて、自分の単純さに呆れてしまう。

背を向けて鼻をかもうとすると、真城は明から少し離れた。

やっぱり気を使ってくれているのだとわかって、明はまた、単純に嬉しくなる。

「なんだ……。その……」

明が落ち着いた頃合を見はからったように、真城は口ごもりながら切り出した。

「俺のミスだった。君の所属している紹介所に確認の電話を入れてみたら、回答の電話をもらった。男性の家政夫をお願いしたつもりが伝えていなかったらしい。それに申し込みの際、家族構成を聞かれたんだが……さつきも言ったけれど入院している家政婦は俺にとって祖母同然だから、祖母と暮らしていると……。俺のミスだから君との契約は続行する」

「あ、ありがとうございます」

「けれど……勤務が日野^{ひの}さんが復帰するまでの三ヶ月というのは変わらない。もし住む場所が決まったら、すぐに教える。さつきも言ったが、住み込みでも通いでも俺は気にしない」

日野……。それが元々いた家政婦さんの名前なのだろう。

「それと、二階の東の部屋と南の部屋、一階の中庭に面した部屋と、キッチンの奥の部屋は入らないでくれ」

「は？」

明の心拍数がいきなり跳ね上がった。

いよいよこのお屋敷を思いつきり掃除できるんだと思うと、なんだか妙に興奮してしまう。

「君のメインの仕事は料理と洗濯。あとは玄関や応接室、庭の掃除だけでいい」

「えっ？ あの……。他の部屋は？」

高揚した気分がちよつとだけ冷める。掃除するのなら、隅々まで徹底的にやりたいのに……

「さつきも言っただろう。俺は掃除機の音が嫌いだって。だいたい他の部屋は使わないじゃないか。使わない部屋の掃除なんかしても意味がない」

真城は物わがりの悪い子供を見るような目つきになった。

「でも、やはりお掃除はしないと……。あつ、掃除機をかけなければいいんですよね？ 掃除の方

法は他にいくらでもありますし」

どうしても、お屋敷中をピカピカにしたい。

だってせっかくのお屋敷なのだ。子供の頃から憧れていた広いお屋敷。だからどこもかしこもすつきりと清潔にしたい。そうすればもっと素敵になるはずだ。

「は？」

真城は一瞬、妙な顔をした。

「だって、掃除機の音が嫌いなんですよね？」

「掃除機の音は確かに嫌いだが……。そうではなくて……。なぜ、家の中のすべてを掃除する必要がある？ 君は……。そんなに掃除が好きか？ 普通同じ給料なら、楽な方を選ばないか？」

「私、掃除が大好きなんです。だからこの仕事に付いたんです。あ、炊事洗濯家事一般が全部好きで、特に窓拭きが大好きで……。知ってますか？ 窓って洗剤とか使わなくても綺麗にできるんですよ。水拭きと空拭きだけで……」

勢い込んでそう言うと、真城はまるで珍しい生物でも見るような目つきになった。

「あの……。何か？」

そんな目で見られて、明は少し不愉快になった。

「いや……。そんなに掃除をしたいのなら、すればいい。ただし、俺の世話は焼くな」

どういう意味？

本当に世話を焼かないとなると、食事の面倒も見なくていいことになってしまう。そんなはずはないと思うけど。

「あの、それは具体的にはどういうことでしょうか？」

ここは一応聞いておいた方がいいだろう。

「まさか、食事もないってわけじゃないですよね？」

「はっ？」

聞き返された。ものすごく機嫌が悪そうな顔になっている。

大きいけれど切れ長の目がやや吊り上がり、眉も跳ね上がっていた。眉間には皺。機嫌が悪いを通り越して、これではただのガラの悪い男だ。

いや、『ただの』ではなご。

真城の顔はやはり見惚れるほど美しかった。

本当に、なんでこんな性格なんだろう？

なんだか神経質で、意地悪で……。ついでに頑固？

服装だつてちつとも構わないし……。もつたいないなあ。このお屋敷といい真城さんといい……。きちんと手を入れて、毎日磨いていけば、もつともつと輝くの……

「なんだ？ 俺は今、どういう意味か聞き返したつもりだが？ まさか俺に見惚れていたんじゃないだろうな」

「す、すみません」

あまりに凶星すぎて、頬がカツと火照った。

「あの、えっと……。だから……。お食事は作ってもいいんですよね？」

「あたりまえだ。ただし、俺が欲しい時に作れ。コーヒーの類も俺が淹れると言ったら淹れる」

腕を組み、少しだけふんぞり返るようにして、真城は明にそう言い放った。

その様子はまさしく美しい暴君といった感じで……。はまりすぎて、見ていると笑いがこみ上げてくる。

「だが、俺が呼ぶまでは俺の部屋には入るな。お茶はいかがですか？ とか、おやつは？ とか言って、いちいち部屋に入ってくるな。ノックも厳禁。仕事を邪魔されるのが、俺は何より嫌いだ」

「はい。わかりました」

なるほど、と明はひそかに頷いた。

やっぱりこの人は神経質なんだわ。執筆に集中したいのね。

服装が適当なもの、使っていない部屋の掃除がいらぬもの、仕事にだけ全精力を注いでいることが理由なのかも？

そのくせ、本当になんていうか、真城さんは無駄に綺麗というか……

なんで作家の道を選んだんだろう。どう見たって、モデルとか芸能人の方がよさそうなのに……

明はつい、真城の姿を眺めてしまう。

その視線に気付いたのか、真城の眉が思いつきり寄せられた。

「なんだ？ また俺に見惚れていたのか？」

「え、いや、あの……、その……」

見惚れていたわけではない。ただ、見ていただけだ。けれど、それをきちんと説明すると、また図に乗らせてしまうだろう。

だって要約すると、無駄にかっこいい、ということなのだから。

それにしても、二度も続けて俺に見惚れていただろう、なんて聞くのはちよつと自意識過剰だと

思う。

そんな風に思っていたら、突然爆弾発言が降ってきた。

「まさか、恋愛感情なんか芽生えていないだろうな？ いいか、絶対に俺に惚れるな」

「えっ、えええっ！」

明はびっくり返ったような大声を出してしまった。

なっ……なんなのこの人？

ここまで来ると、自意識過剰というよりも、病気に近いのではないだろうか。それともただのナルシスト？

こんな人を好きになるなんて、絶対にない！ 絶対に……！！

明は心の中でそう叫んだ。

あなたのことは絶対に好きになりません。

だが仮にも雇い主である真城に対してそんなことを言えるわけもなく、明はただ、首を縦に振って頷いた。

「わ、わかりました」

続けてそう答える。

真城は疑わしそうな顔をして無言で明を見ていたが、唐突に「お茶」と口にした。

「はっ？」

「だからお茶だ。喉が渴いた」

真城はぶつきらぼうに言い、ダイニングキッチンに向かった。

「あ、はい。ただいま……」

慌てて明もダイニングキッチンへ行く。

さつき覗いた時にも思っただけれど、ダイニングキッチンは広い。キッチンスペースだけでも明が住んでいたアパートの部屋と同じくらい面積がある。

屋敷そのものは築五十年以上は経っていそうだが、ここは最近改装したらしく、立派なシステムキッチンだ。

中央にあるのは、対面式の大きなカウンターキッチン。

そのカウンターの前に、リビングといっても差し支えなさそうな広さのダイニングルームが広がっている。

一人暮らしにもかかわらず、六人掛けの大きなテーブルに、キッチンに立っただけでも見える壁掛けの大画面テレビ。

だが——シンクの中は汚れた食器でいっぱい。テーブルの上にも新聞や飲みかけのカップがいくつも置きっぱなしになっていた。

真城はそんな状況を気にする様子もなく、椅子に腰掛けている。

とりあえず洗い物だけでもしてしまわないと……

あまりの惨状に、明は反射的に腕まくりをしてシンクに向かった。

「おい、何をしている？ 俺はお茶を飲みたいと言わなかったか？」

「そうですね……、ここを片付けないと……」

「後にしろ。今お茶が飲みたいんだ」

でも……と明は言いかけてやめた。真城は雇い主なのだ。こんなことで逆らって、またクビだと言われたらたまらない。

「わかりました」

職業柄か、キッチンに立つと何がどこにあるかなんとなくわかる。ダイニングのテーブルとおそろいのデザインの食器棚を開けると、紅茶の缶が目に入った。

ダーズリンとオレンジペコ。それにアッサムの茶葉がある。

同時に素敵なティーカップセットを見つけ、思わずそれらに手を伸ばしかけた時、真城の声がした。

「何をしている？ お茶といたら日本茶だろう？ なんで紅茶？」

そ、そうだよね。

えっと、日本茶は……

慌てて日本茶を探そうとすると、真城が椅子から立ち上がってキッチン側に回ってきた。

「いいか、日本茶の葉はここ……」

棚を開いて明に見せる。

「赤い筒が、みなまた茶で、銀が知覧茶。黒がほうじ茶。その小さくて白いのは玉露だ」

すなわち、それらが真城の好みのお茶で、気分によって変えているのだろう。ということは……

「あの、今はどれをお飲みに？」

「お茶だ。寝起きや昼間にお茶と言ったら、みなまたか知覧。玉露の時はそう指定する。夜はほうじ茶。それとコーヒーはここ」

と、日本茶の缶の上の棚を指差した。コーヒーは一種類しかなかった。

「特製ブレンドで俺のこだわりだ。紅茶は来客用。日本茶もコーヒーも紅茶も切れそうになったら、そこ」

と、今度は扉の裏側を指差した。

「ここに貼つてある紙に業者の連絡先が書いてあるから、忘れずに頼め」

「はい。わかりました」

真城は言うのと、また椅子に座る。

明は言われた通りみなまた茶を淹れて真城に出した。彼はそのままゆっくりと飲み始める。

熱いとか濃いとか文句が出ないことにほっとして、明はさっそく洗い物にかかった。

さっきのティーセットもそうだけど、なんだかかわいらしいとか、女性が好みそうな花柄デザインの食器ばかりだわ。

ティーカップの取っ手などは細くて折れそうだ。しかも繊細な飾りがついているから、洗うのも一手間かかる。

それはそれで明にしてみれば楽しい作業なのだが……

一作品しか読んでいないけれど、あの泣ける恋愛小説を書く人物には似合っている。けれど、素

の真城忍とは不釣り合いだ。

華奢なカップを洗いながら、明はどうしても違和感を覚えてしまう。

きつと誰かの趣味なのだろう。

彼女でもいるのかしら？

嫌な男だけど、顔だけはいいし、いてもおかしくないけど……

そんなことを考えていた時に、ふいに真城から声をかけられた。

「君は……聞かないんだな」

「はい？ 何をですか？」

「いや、日野さんが入院してから、何人かの家政婦に来てもらっていて……もともと住み込みなのは君だけだが……」

何かを思い出したのだろう、真城の目つきが凶悪になった。

「どの女も、それこそ若いのも年寄りもみんな、その食器を洗って、『彼女のご趣味ですか？』って……。そのあともプライベートをあれこれ聞いてきて……。男の家にそういう食器があつちゃいけないのか？ おまけに彼女がいるって決めつけて……。男の家にそういう食器があつちゃ

ということは、彼女の趣味ではないし、彼女もいない？

食器は真城自身の趣味？

「……とにかく聞かなかったのは君が初めてだ」

聞かなかつたけれど、頭の中では思っていたから、どういう顔をしていいかわからない。明はあ

いまいに微笑んだ。

「その様子だと俺に惚れないな」

真城はどこか安心したように呟つぶやいてお茶をすすする。

「えっと……」

また、自意識過剰というかナルシストというか……

なんでさつきからそういう話ばかりするのだろうか。明は少し困惑した。

ここはがつんと言っておいた方がいいだろう。

「惚れないと思います。だいたい年下は好みではありませんから」

どんなに顔がよくても、その口の悪さと意地悪さではお断り。

そう言つてやりたいのをぐつと堪こらえて、あえて無難に答えてみた。すると真城は怪訝けげんな顔をする。

「あ？ 年下？ 君はいくつだ？」

「二十五です。十一月で二十六になりますけれど……」

女性に年齢を聞くのは失礼じゃないか、と思いつながら答える。

「なら、俺の方が年上じゃないか」

「え？」

年上つて……いくつだろう？

門前で声をかけられた時は、すぐく若く見えた。

だから、年上だと聞いてもせいぜい二つ三つ上だろう、と考えていたら、それを見通してか、真

城が笑った。

「驚け。もうすぐ三十二だ」

「ええっ！」

今度は本当に驚いて、明は目を見開き思いつきり大声を出した。

「ふん。やはり驚いたな」

真城は少し人の悪い笑みを浮かべたままだ。明の反応に満足しているようにも見える。

確かに芸能人であれば、実年齢より若く見える人たちはたくさんいる。

おそらくエステに行ったり、ヒアルロン酸を注入したりしている人もいるのだろうけれど、この格好から察するに真城は何もしていないさぞうだ。

そもそも外に出て人に顔を見られる仕事ではないのだから、そういう類たぐのケアをする必要もないだろう。

「お……驚きました……。あ、でも、でも私……」

年上だと知つてもあなたなんか好きにならない。

そう続けようとしたが、そこまでして否定するのはなんとなくためらわれた。

「そういう家系だ。親も兄弟も親戚も、みんな実年齢より若く見える。ただし、死ぬのも早い。一番の長寿が叔母だ。六十二まで生きた。彼女も見た目は四十代後半くらいだったな……。今も生き残っているのは、俺といとこの二人だけだ」

最後は寂しそうな表情を浮かべて、真城は周囲を見回した。

かつてはこの広いお屋敷に相応しい人数の家族がいたのだろう。それを懐かしんでいるような真城の様子を見て、明まで悲しい気持ちになった。

「えっと、その……。真城さんは長生きします、きつと……。だって私がいるんですもん。長生きのできるバランスのいい食事を作るの、得意なんです、私。それを毎日食べれば……」

「ここは慰めるべきなのだろうか？」

そんなことを一瞬考えた。が、上手な言葉が出てこない。

「えっと、とにかく食事の仕方健康に……」

慰めるなら普通に慰めればいいのに、どうしてこんなことを言っているんだろう。

明は自分がなんだか情けなく思えてきた。

見れば真城の表情が少し歪んでいる。

怒っているのだろうか。明はひやひやして彼が何か言うのを待った。が、真城は何も言わずに立ち上がる。

「あの……」

窺うように声をかけると、うるさそうな視線が返ってきた。

「その、もうご用はないでしょうか？」

「ない。ああ……。そうだ。言い忘れた。呼び鈴が鳴っても宅配郵便以外は出るな。アポのない人間も入れるな。それと、とにかく俺に惚れるな。呼ぶまで来るな」

まだ惚れるだのなんだのという話をするのかと、明は少し呆れた。

誰かに惚れられて、よほど嫌な思いでもしたのだろうか。だとしたら、念を押されるのもわかるけれど……

いずれにしろ、今回の雇い主はやりにくい相手だ。

明はそう思いながら頷いて、ダイニングから出て行く真城を見送った。

明が真城邸で働き始めてから四日が経った。屋敷にも真城にも、そして、ここでの生活そのものにもまだ慣れていない。

それでもこれまで通り朝六時にはきちんと目を覚ます。真城は午前四時頃に寝て正午少し前に起きる、といった生活をしている。その生活パターンから考えると、家政婦である明もこの時間に起きなくていいのだが、早起きが身体に染み付いているのだ。

「んーっ」

ベッドの上で伸びをすると、まだまだ見慣れない凝った模様の天井や、白壁が目に入る。部屋も広いし、インテリアも何もかもが豪華だ。今まで住んでいたアパートの安いパイプベッドやビニールの床じゃない。作り付けの大きな本棚やクローゼット。ホテルの部屋にありそうな鏡付きのライティングデスク。

あー、幸せ。こんな部屋で寝起きできて。でも……

この屋敷ではパジャマ姿のまま洗面所に行くわけにはいなくて、それが面倒だと感じる。

やっぱり男性の一人暮らしの家に女の自分が住み込むのはまずかったのかもしれない。早くアパートを探さなければと思う。

仕事に慣れるまではと、またアパート探しにも出かけていないのだ。

もともと真城は今のところ、宣言通りに寝込みを襲いになんて来なかったし、一度だけだが洗面所で明と出くわした時などは、そっと回れ右をしてくれた。

「とにかく今日も頑張ろう」

着替えて、部屋を出る。

おそらくまだ寝ているであろう真城を気遣い、そっと廊下を進んで洗面を済ませた明は、掃除道具を持って自分の部屋へと引き返した。

まず朝一番で、自分の部屋の掃除をてっとり早く済ませるようにしているのだ。

「あら？」

ライティングデスクを拭こうとして、自分の携帯にメールの着信があるのに気付いた。

馬場からのメールだった。

男性と二人暮らししているような状況だけど大丈夫か、という内容だった。しかも何かあったらすぐに帰って来いとまで書いてあって、明はつい笑ってしまう。

馬場さん、本当に私の肉親みたいね。

大丈夫です、とすぐに返信して、明は一日の仕事に取り掛かった。

初日に、自分の部屋と定めた客間にキッチン、それからバスとトイレの大掃除をした。

それから四日、順々に部屋を巡って掃除をしていたが、まだ掃除をしないとけない部屋が残っているのだ。

明は今日掃除しようと思っていた部屋の前に立ち、そつとドアノブを握った。服装は働きやすいストレッチジーンズにTシャツ。それにポケットがいっぱいついた赤いエプロン。

片手には掃除機以外の掃除道具一式が入ったバケツを持った。

初日に、真城から入るなど言われた部屋以外で、まだ掃除をしていないのはこの部屋だけだ。

ここも広いのだろうか？

屋敷にはLDKの他、十二の部屋がある。全部の部屋のドアを開けたわけではないけれど、数だけは数えていた。

他に納戸なんどもあったが、その納戸ですら六畳ほどの広さがあったのだ。この部屋もどれだけ広いのだろうと、明はわくわくしながらドアを押した。

「わあ……」

思わず声を出して明は目を睜なる。

広さに驚いたのではない。本の多さに驚いたのだ。

「ここ……書庫？」

よね……

二十畳くらいの部屋だ。正面にある細い窓以外の壁はすべて本棚で埋め尽くされている。

部屋の中央にも背の低い書棚が背中合わせに配置され、窓の下には古い勉強机と椅子が置かれていた。

「すごい。すごい」

無類の本好きである明は瞳を輝かせ、掃除も忘れて書棚を見て回った。しかし、すぐにその瞳を曇らせる。

「なんなの、まったく……」

本の整理が全然されていない。

それどころか、真城が資料として読んだらしき本が出しっぱなしになって床に転がっていたり、窓際に放り出されていたりする。

どうしてこうなんだろう。せめて本棚に戻せばいいのに。

本が好きなだけに、明はつい頬を膨らませてしまう。

怒りながら拾い上げたのは、『漆黒の恋人』というタイトルの翻訳本だった。

それもヴァンパイア物。

人間として育った吸血鬼の少女が、ヴァンパイアの世界から彼女を迎えに来た青年やヴァンパイアハンターと出会い、彼らとともに事件を解決していく、というあらすじだ。

真城さんがこういうファンタジーを？

なんだか意外だった。

彼はアンハッピーエンドな恋愛物を得意としている作家だが、それらの舞台は大体が現代のリアル社会だ。

明は一作しか読んでいないが、彼の作品に対する書評やレビューにはそう書かれていた。

何か今までと違う物でも書くつもりなのかしら？ それとも実はこういうジャンルが好み？

ふと興味を引かれて明は本のページをめくった。——それから一ページ、二ページと読み進める。え……

これ、おもしろい。

ほんの数ページ読んだだけなのに、明はもうその本の虜とりこになっていた。掃除のことも忘れて読み進める。

人間とヴァンパイアのバトルはもちろん、恋愛部分も予想以上におもしろい。

廃墟はいこと化した町や古城。その中で繰り広げられる物語。明の目の前に、町の風景や城の内部の様子が広がっていく。

もちろん、ただの想像だ。でもそこに、妄想に近いものが加わるのを明は感じていた。自分が登場人物の一人になって、物語の進行に参加し始めたのだ。文字に目を走らせストーリーを追う合間に、明はいつもこうして、あれこれと自分なりのストーリーを作ってしまう。

ああ……。ここ、このシーン。

『アールから何か言ってきたのですか？』

『ああ……。しかし……』

明は頭の中で、実際のストーリーにはない部分を勝手に想像し始めていた。

明は今、いるはずのないヴァンパイアの侍女になっている。そしてヒーローのヴァンパイア伯爵

クライヴに声をかけているのだ。

『駄目です。クライヴ様。行ってはいけません。アールの話は罫わなに決まっています』

「何言ってるんだ？　そこでクライヴがアールの話に乗らないとストーリーは進まない」

はっ、として明は妄想から覚める。

頭の中の明の言葉に返事をしたのは、現実の真城の声だった。

「あ、あ……。私……」

かあつと全身が熱くなった。

頭の中だけで考えていたはずなのに、いつの間にか声に出していた。

ものすごく恥ずかしいところを見られた。いや、聞かれてしまった。

「その本を読んで妄想全開か？　ヒロインが捕らわれてどうしようか、クライヴが悩んでいるシーンだろ？　そこはクライヴ一人だったはずだが？」

くすりと真城に笑われた。

「なっ……。た、ただの独り言です。そ、それよりこの本は真城さんの？」

何も笑うことはないのに。そう思ったけれど、確かに笑われても仕方ない。明は顔を赤くしたまま横を向いて話を逸そらす。

「親や叔母が揃えた古い本もあるが、今残っているのは俺の趣味の物がほとんどだ。まあ資料本もあるが、そんなに読みたければ、いつでも好きに読むといい」

「あ、ありがとうございます」

「それより夕飯は？ 何度呼んでも来ないし、だいたい、なんで主人の俺が君を探さなきゃならんんだ」

「え？ 夕飯？」

見ると窓の外はすっかり暗くなっていた。

「すみません。すみません」

そんなに長い間、本に夢中になっていたんだ……

悪い癖が出てしまった。

恥ずかしさ以上に、まともに職務を果たせていなかったことへの悔しさが押し寄せてきて、明はいたたまれなくなった。

「今、作りますっ！」

慌てて持っていた本を置いて書庫を飛び出す。

ああ。もうっ。なんて間抜け……

本が好き。読書が大好きだ。けれど、時と場合を忘れてつい夢中になってしまうのがこの趣味の最大の難点で……

やだ……食材がっ……

掃除を終わらせたらい買い物に行く予定だった。

宅配で一週間分ぐらいの食品をあらかじめ購入することもできるが、なるべくその日その日で新

鮮な食材を使って料理をしたい。

真城から好きな店で好きなように買えばいいと言われたので、明は初日以外は買い物に出ている。その時に安くていい物を売るスーパーも既に見つけてある。

財布を握りしめ、慌てて勝手口から裏庭を抜け通用口から外へ出た。

ドン。

「きゃっ」

勢いよく飛び出したせいで、明は誰かとぶつかった。

「ごめんなさー」

そう言っ頭を下げようとしたけれど、ぶつかった相手はもう明の目の前にはいない。

何も言わず、明を見ようともせず、背を向けてすたすたと歩き去っていく。それは白いジャケット姿の女性だった。やや赤く染めた髪がジャケットの白に映えている。

急いでいるのだろう、謝罪の声に反応を見せない。明も急いでいたため、深く考えずにスーパーへ走った。

* * *

ピーマンを手に取りろうとした時、ふと視線を感じて明は顔を上げた。あたりを見回してみても、スーパーの客たちは皆、自分の買い物に集中している。

気のせいだろうか？

だが、レジに並んでいる時も、どうも誰かに見られている気がして落ち着かない。私、何か変な格好してるかしら？ エプロン姿なのが珍しい？

おしやれなデザインだし、仕事着のつもりでつい着けてきちゃったけど……

こんなお屋敷街じゃまずかっただろうか。

明は釈然としないまま会計を済ませ、帰路についた。

その道でも……

つけられている？

真城の屋敷に近付くにつれ、人通りはほとんどなくなるはずなのに、ひっそりとした足音が明の背後から聞こえてくるのだ。

まさか、スーパーから……

唐突に怖くなり、立ち止まった。

振り返って確かめようと思っても、足が竦んでうまくいかない。

考えすぎだ。たまたま行く方向が同じだけ。そう自分に言い聞かせようとしても、膝ががくがくと震えてきて、買い物荷物を持って立っているのもやつとだった。

足音が近付いてくる。よく聞くと、ハイヒールだと思われるややカン高い靴音だ。

女？ 女性なら痴漢じゃないよね……？

どくん。それでも心臓は飛び跳ね続ける。冷や汗が背中を伝う。思わず目をつむり、息を潜める

ようにして背後の気配を探っていると、近付いてきた足音が横から前方に移動していった。

え？ 前？

おそるおそる目を開けると、明の目の前を歩いて行く女がいる。

自分の勘違いだった。やっぱり行く方向が同じなだけだったんだ。

ほっと胸を撫で下ろした瞬間、明は女の服装と髪の色を見て、あつと声を上げそうになった。

白いジャケットに赤い髪……。屋敷を出た時にぶつかった、あの女だ。

偶然だよな？ あそこでぶつかったのも、今ここにいるのも、あの人がこの辺に住んでいるならあり得ることなわけで……

考えすぎ、絶対に……。スーパーで誰かに見られていた気がしたけれど、あの女性だとは限らないし……

明は頭を振って、襲ってくるおかしな考えを追い払った。

それより早く帰って夕ご飯を作らないと、また真城の機嫌が悪くなるだろう。そっちの方が今は優先事項だと、止めていた足を急がせた。

* * *

「買い物に行っていたのか？ 遅かったな」

背後を気にしつつ勝手口から屋敷のキッチンに入ると、真城が腕組みをして待っていた。

「すみません。今作ります」

明は慌てて夕食の準備に取りかかったけれど、真城はまだキッチンに立っていた。ダイニングの方に立っているのならまだしも、なぜかキッチンに居座っている。

何か用があるのだろうか。野菜を洗っている手を止めて真城を見ると、彼は険しい表情を浮かべていた。

「あの……」

確かに、午後は掃除もしないですつと本を読んでいた。夕食の支度もすっかり忘れていた。彼はきつと怒っているのだろう。怖い顔で睨まれても仕方がない。

そう思ったし反省もしたけれど、キッチンにずっといられると料理の邪魔になる。

「今日は本当に申し訳ありませんでした。あの……、これからはきちんとやりますし、座って……」
はつきり『邪魔』と言うと角が立つ。だからダイニングで座って待っていてくれと伝えようとしたが、途中までしか言えなかった。

「何を気にしていた？ 外で何かあったか？」

真城がそんなことを聞いてきたからだ。

「え、あの？」

「さつき帰ってきた時、随分背後を気にしていたな？ 誰かにつけられたとか、変な奴がいたとか、そんな感じだった」

真城の鋭い指摘に明は一瞬息を吞む。

作家ならではの観察眼なのだろうか。明の些細な動作一つでそんなことまで見抜くなんて……

「あ、なんか私の勘違い、……だと思えます。出かける時に偶然ぶつかった女性を、帰り道でもまた見かけたので」

「女？」

真城がわずかに眉を寄せる。

「どんな女だ？」

「どんなって……」

苛々した様子で真城は髪をかき上げた。

「かなり赤みのある茶髪で、白いジャケット。顔ははつきり見ていませんが、三十歳くらいかな？」
そう答えたとともに、真城は大げさともいえる仕草で頭を抱え込んだ。

「あいつか……。たたくしつこい……」

「あいつ？ お知り合いなんですか？」

しつこい、という発言も気になったが、それと同じくらい、顔見知りであるかのような言い方が気になって、明は思わず手を止めて聞いていた。

「あ、いや……」

我に返ったような顔で、真城は視線を宙にさまよわせた。

「気にしなくていい。今度見かけても相手にするな」

そう言われても、さつきの言い方を聞いたら、どうしたって気になってしまう。絶対に何かある

に違いない。

元カノだとか、別れた妻だとか、なんとなくそんな気がしてしまう。もしそうだとしたら……

あれこれ想像をめぐらせそうになって、明は慌^{あわ}てて頭を振った。いけない。また私の悪い癖。

それより今は夕飯を作らなきゃ。

どこの家へ行っても詮索好きの家政婦は嫌われる。だから、勤め先の家の事情に首を突っ込まないのはプロの家政婦としての鉄則なのだ。

「とにかく……。変質者じゃなくてよかった……。いきなり出かけるな。買い物に行く時は俺にそう伝える。それに日が落ちてから行くのはやめろ」

ぶっきらぼうに言い残して、真城はリビングに消えた。

あっ……。私、心配されてた？

変質者じゃなくてよかったって……。真城さん、やっぱり優しいところがあるんだな。

初日にもそう感じた瞬間があった。

トータルで見るとかなり嫌な男だから、その分ちよつとした優しさが際立って見えるだけなのかもしれない。

それでも、心がほんのりと温かくなった。

3

あ、また……

二階のバルコニーの窓を磨きながら、明はもう見慣れてしまった光景を目にして、かすかなため息をついた。

数人の女性が門の前から屋敷を見上げている。

真城のファンの女性たちだ。住所は公開していないのに、どこから嗅^かぎ付けてくるのか、コアなファンがこうしてやってくるのだ。

この屋敷で働き始めてから十日。

屋敷の周りにファンがいることにも慣れたし、彼女たちから嫉妬のこもった眼差しを向けられることにも慣れた。

本は読むけど雑誌はほとんど読まない明は知らなかったが、真城は美貌の恋愛小説家として、女性誌によく取り上げられているようだった。

そのせいで、作家としての真城のファンというより、アイドルのおっかけに近いファンまでいる。ただ黙って屋敷を見つめる者。門前にプレゼントを置いていく者。勇気を出して呼び鈴^かを押す者。外に出てきた明にプレゼントを託^{たく}す者。